

《原著》

大学生における学業意欲の低さおよび抑うつと キャリア成熟の関連

陳内彩音¹・土井理美^{1,2}・堀内 聡³・坂野雄二⁴

The relationship between passivity to study, depression and career maturity in college students

Ayane Jinnai¹, Satomi Doi^{1,2}, Satoshi Horiuchi³, Yuji Sakano⁴

Abstract: Career maturity indicates the thoughts and behaviors regarding career decisions and the occupational life (Sakayanagi, 1996). Career maturity has been found to be related to depression and passivity to study in college students (Mizogami, 2009; Walker & Peterson, 2012). This study investigated the features of low career maturity in college students in terms of depression and passivity to study. Participants included 361 college students. The participants completed the Centre for Epidemiologic Studies Depression Scale (Shima et al., 1985), the Passivity Area Scale (Shimoyama, 1995), and the Career Readiness Scale (Sakayanagi, 1996). Cluster analysis results revealed five clusters: passivity to study with depression type, passivity to study type, high depression type, high motivation to study type, and average type. Analysis of variance showed that the score of career maturity in the passivity to study with depression type and the high depression type were equal to that of the average type. In contrast, only the passivity to study with depression type scored lower in career maturity than the average type. Therefore, the results indicated that college students who belonged to the passivity to study with depression type were at a higher risk when making a decision about their career or job hunting.

Keywords: キャリア成熟 (career maturity), 抑うつ (depression), 学業意欲の低さ (passivity to study), 大学生 (college student)

-
- 1 北海道医療大学大学院心理科学研究科
Health Sciences University of Hokkaido, Graduate School of Psychological Science
 - 2 日本学術振興会特別研究員
Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science
 - 3 岩手県立大学社会福祉学部
Iwate Prefectural University, Faculty of Social Welfare
 - 4 北海道医療大学心理科学部
Health Sciences University of Hokkaido, School of Psychological Science

問 題

平成25年度に実施された学校基本調査では、平成25年度の大学卒業者のうち安定的な雇用に就いていない者が20.7%（約11万6千人）、進学も就職もしていない無業者が16.6%（約8万6千人）いることが示されている（文部科学省，2013）。大学卒業後の就労の問題は、経済状況や産業構造といった外的要因の影響があげられる一方、大学生のキャリア成熟^{注1)}の程度との関連も指摘されている（安達，2004）。キャリア成熟とは、大学生の職業選択と職業生活への考え方や取り組み姿勢と定義され、関心性、自律性、および計画性の3つの要素で構成されている（坂柳，1996）。関心性は、自己のキャリアに対して積極的な関心をもっている程度を意味している。また、自律性とは、自己のキャリアへの取り組み姿勢が自律的である程度、計画性は、将来展望をもち自己のキャリアに対して計画的である程度をそれぞれ意味している。先行研究では、キャリア成熟の高さは、職業生活における適応や満足感と関連があることが指摘されている（安保・石津・菊池・千葉・猪股，2008）。具体的には、将来展望が明確であり、職業選択に対して主体的に取り組んでいる者、つまり関心性と自律性が高い者ほど、就職後に仕事が自分に合っているという感覚が高まること、仕事への満足感が高いこと、離職の意向が低いことが明らかとなっている（Saks & Ashforth, 2002）。以上のことから、就職をひかえる大学生のキャリア成熟の高さは、大学卒業後の職業生活の適応を予測すると言える。一方で、キャリア成熟の程度が十分ではない大学生に対しては、早期にキャリア支援を行う必要性が指摘されている（安達，2004）。そして、早期のキャ

リア支援を実現するためには、キャリア成熟に関連する要因を特定する必要がある。キャリア成熟に関連する要因を明らかにすることで、キャリア支援における介入標的を明確化することができると考えられる。

キャリア成熟に関連する要因として、抑うつと学業意欲の低さがあげられる。抑うつとは、抑うつ気分（減った気分）、興味や喜びの喪失、易疲労性や自信喪失などの状態を指す（坂本・大野，2005）。抑うつの高さは、意思決定の能力を低下させるため（Saunders, Peterson, Sampson, & Reardon, 2000）、キャリア成熟を阻害することが明らかとなっている（Walker & Peterson, 2012）。また、学業意欲の低さとは、大学において勉学への興味を失い、学業に関する意欲が低い状態を指す（下山，1995）。学業意欲が低い大学生は将来展望および目的意識が希薄であり、就職活動において消極的であることが明らかとなっている（溝上，2009；蔣，2013；高山，2006）。以上のことから、抑うつを示す大学生、および学業意欲が低い大学生は、キャリア成熟の程度が十分ではない可能性が高い。

ところで、抑うつと学業意欲の低さに関して、2つの変数は独立したものであり、抑うつを呈していても学業意欲の高さを示す大学生や、反対に抑うつは呈さないものの学業意欲が低い大学生がいることが知られている。例えば、狩野・津川（2011）は、大学生の抑うつ気分と学業意欲の低さの得点についてクラスター分析を行い、（a）抑うつ気分が高く、学業意欲の低い群、（b）抑うつ気分は低いものの、学業意欲が低い群、（c）抑うつ気分は高いものの、学業意欲が高い群、（d）抑うつ気分が低く、学業意欲が高い群、（e）抑うつ気分、学業意欲ともに平均的な群の5群に大学生が分類されることを明らかにしている。したがって、大学生の状態像を理解するためには、抑うつと学業意欲の低さを同時に測定する必要がある。しかしながら、抑うつと学業意欲の低さから大学生の群分けを行い、群によるキャリア成熟の差異を検討した研究はない。

注1) キャリアに対する考えや行動を表す概念としては、キャリア発達、キャリア決定、キャリア意識などの言葉が使用されているが、本研究では、これらの概念をキャリア成熟（キャリアの選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢；坂柳，1996）という用語に統一した。

そこで本研究では、抑うつと学業意欲の低さの得点から大学生を分類し、群間のキャリア成熟の差異を探索的に検討する。抑うつと学業意欲の低さの得点によって分類された各群におけるキャリア成熟の相対的な低さを明らかにすることによって、進路選択や就職に際して困難が生じる可能性がある大学生の状態像が特定できる。どのような特徴を持つ大学生が就職活動において困難が生じやすいかを理解することで、早期のキャリア支援につながると考えられる。

方 法

1. 調査協力者

地方私立大学の学生428名に対し、調査用紙を配布した。406名（男性111名、女性293名、性別未記入2名、回収率94.9%）から回答を得た。そのなかから、未回答の項目があった者、1つの項目に複数回答した者45名を除外した361名（男性102名、女性259名、平均年齢 20.08 ± 2.13 歳）を分析対象とした。調査協力者は、大学1年生から3年生であった。なお、4年生は多くがすでに就職活動を終えており、他学年と職業に対する意識が異なる可能性があるため（半澤・坂井, 2005）、本研究では対象としなかった。

2. 調査期間

調査は2013年11月18日～12月11日にかけて行われた。

3. 調査材料

（1）フェイスシート

性別、年齢、学年、学科について回答を求めた。

（2）意欲低下領域尺度（下山, 1995）

大学生の学業、授業、学生生活における意欲の低さを測定する尺度である。「学業意欲低下」, 「授業意欲低下」, 「大学意欲低下」の3因子15項目から構成されている。なお、本研究では学業意欲低下得点のみを分析対象とした。調査対象者には、4件法（1点「あてはまらない」～4点「あてはまる」）で回答を求めた。得点可能範囲は15～60点、各下位尺度の得点可能範囲は5～2

0点である。得点が高いほど意欲が低いことを、得点が低いほど意欲が高いことを示す。本尺度は、十分な信頼性および妥当性が確認されている（下山, 1995）。

（3）日本語版 Center for Epidemiologic Studies Depression Scale（島・鹿野・北村・浅井, 1985；CESD）

最近の1週間の抑うつ気分、対人関係上の問題、身体症状（食欲や睡眠など）、ポジティブ感情の欠如を測定する尺度である。調査協力者には、4件法（0点「めったにまたは全くない」～3点「たいていまたはいつもある」）で回答を求めた。得点可能範囲は0～60点であり、得点が高いほど過去1週間で抑うつを多く経験したことを示す。本尺度は、十分な信頼性及び妥当性が確認されている（島他, 1985）。

（4）キャリア・レディネス尺度（坂柳, 1996）

大学生が自分のこれからの職業選択・就職などについて、どの程度成熟した考え方をもっているかを測定する尺度である。人生キャリア・レディネスと職業キャリア・レディネスから構成されている。本研究では、職業選択と職業生活への取り組み姿勢を測定する職業キャリア・レディネス尺度の27項目のみを使用した。職業キャリア・レディネス尺度は、「関心性」、「自律性」、「計画性」の3因子で構成されている。調査協力者には5件法（1点「全くあてはまらない」～5点「よくあてはまる」）で回答を求めた。得点可能範囲は27～135点であり、得点が高いほどキャリア成熟度が高いことを示す。本尺度は、十分な信頼性及び妥当性が確認されている（坂柳, 1996）。

4. 調査手続き

講義担当教員の下承を得たうえで、講義前もしくは講義終了後に調査用紙を配布した。配布の際には、調査目的、倫理的配慮を記載した文章を添え、配布時に筆者が口頭で説明を行い、同意が得られた者のみを調査協力者とした。調査は無記名で行われた。質問紙調査を行う際には、定期試験による一時的な学業意欲あるいは抑うつへの影響を考慮し、試験期間以外に調査を実施した。なお、

本研究は、北海道医療大学心理科学部・心理科学研究科倫理委員会で承認（受付番号：平成25年・第23号）を得たうえで実施された。

5. 統計的解析

意欲低下領域尺度の「学業意欲低下」得点とCESD得点の2変数を投入したクラスター分析を行った。次に、クラスターによるキャリア成熟の差について検討するため、職業キャリア・レディネス得点についてクラスターを要因とした一要因の分散分析を行った。統計解析には、SPSS19.0を用いた。

結 果

1. 調査協力者の基本属性

調査協力者の平均年齢は、 20.08 ± 2.13 歳であった。性別は、男性が28.7%（102名）、女性が71.7%（259名）であった。学年は1学年が33.8%（122名）、2学年が41.8%（151名）、3学年が24.4%（88名）であった。

2. 抑うつ得点と学業意欲低下得点によるクラスター分析

意欲低下領域尺度の「学業意欲低下」得点と

CESD得点の2変数を投入した非階層的クラスター分析を行った（Figure 1）。その結果、5つのクラスターが得られ、「学業意欲低下」得点とCESD得点から各クラスターを次のように命名した。第1クラスターから順に、CESD得点、学業意欲低下得点がともに低い値を示す「高意欲群」、CESD得点は低いものの学業意欲低下得点が高い「学業意欲低群」、CESD得点、学業意欲低下得点がともに高い値を示す「抑うつの学業意欲低群」、学業意欲低下得点は平均的であるものの、CESD得点が高い「高抑うつ群」、CESD得点、学業意欲低下得点ともに平均的である「平均群」とした。それぞれのクラスターに配置された人数は、高意欲群79名、学業意欲低群98名、抑うつの学業意欲低群42名、高抑うつ群36名、平均群106名であった。各クラスターにおける記述統計量をTable 1に示した。

3. 各クラスターにおけるキャリア成熟の差の検討

クラスターによってキャリア成熟の程度に差が認められるかを検討するため、職業キャリア・レディネス得点について、クラスターを要因とした一要因の分散分析を行った。その結果、クラスターによる主効果が認められた（ $F(4,356) = 34.93$,

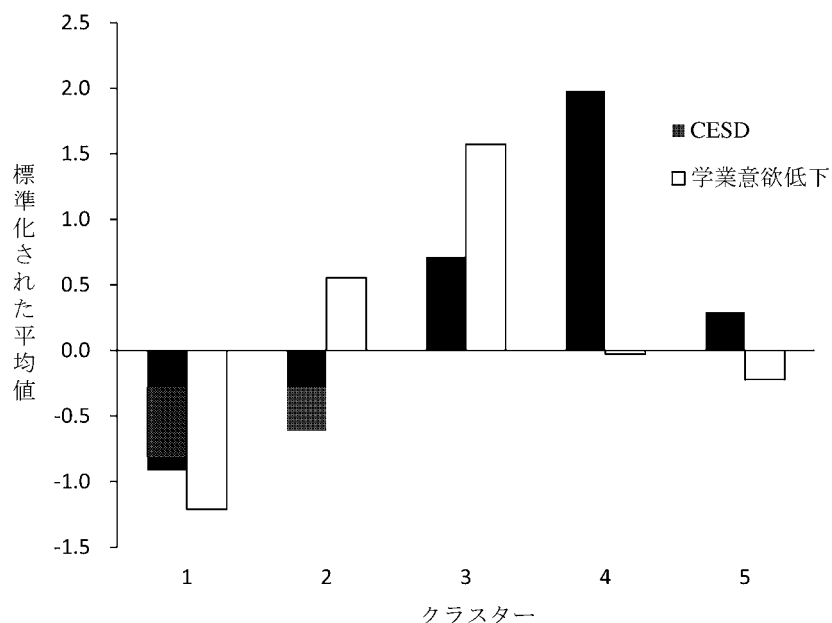


Figure 1. CESD得点と学業意欲低下得点によるクラスター分類

注) CESD: Center for Epidemiologic Studies Depression Scale

Table 1
各クラスターにおける尺度の平均値と標準偏差 (N=361)

	高意欲群 (N=79)	学業意欲低群 (N=98)	抑うつ学的意欲 低群 (N=42)	高抑うつ群 (N=36)	平均群 (N=106)
職業キャリア・レディネス合計得点	107.84 (12.76)	92.09 (11.37)	82.17 (12.93)	91.06 (11.19)	95.96 (13.07)
学業意欲低下得点	8.81 (1.61)	13.90 (1.34)	16.83 (1.61)	12.22 (2.22)	11.66 (1.44)
CESD得点	7.91 (4.75)	10.76 (3.90)	23.17 (5.76)	35.00 (6.22)	19.24 (3.72)

注) ()内は標準偏差, CESD: Center for Epidemiologic Studies Depression Scale

$p < .01$)。効果サイズ (η_p^2) の値は, 28であった。

次に, どのクラスター間に差があるかを明らかにするため, $\alpha = .005$ に補正したBonferroni法による多重比較を行った。その結果, 平均群と比較して, 抑うつ学的意欲低群の職業キャリア・レディネス得点は有意に低かった ($p < .001$)。一方, 平均群と, 学業意欲低群および高抑うつ群との間には職業キャリア・レディネス得点の有意な差は認められなかった (学業意欲低群: $p = .26$; 高抑うつ群: $p = .40$)。したがって, 抑うつを示し学業意欲が低い群のみ, 抑うつおよび学業意欲が平均的である群と比較して, キャリア未成熟の状態にあることが明らかとなった。また, 高意欲群と比較して, 抑うつ学的意欲低群, 学業意欲低群, 高抑うつ群, および平均群は職業キャリア・レディネス得点が有意に低かった (いずれも $p < .001$)。つまり, 抑うつ程度が低く学業意欲が高い群と比較して, その他の群のキャリア成熟は低いことが示された。

考 察

本研究では, 抑うつと学業意欲の低さの得点から大学生を分類し, 群間でキャリア成熟の差異があるか検討することを目的としていた。そのために, まずCESD得点と学業意欲低下得点によるクラスター分析を行った。その結果, 本研究の調査協力者は, 高意欲群, 学業意欲低群, 抑うつ学的意欲低群, 高抑うつ群, および平均群の5群に分類された。この結果は狩野・津川 (2011) の結果とおおむね一致する。抑うつと学業意欲の低

さが必ずしも同時に生じるわけではなく, 抑うつのみ示す群, 学業意欲の低さのみ示す群が存在することが追認された。なお, 高抑うつ群における学業意欲低下得点は, 狩野・津川 (2011) では低い傾向にあったが, 本研究においては平均的であった点に違いが認められた。

クラスター分析で得られた群間のキャリア成熟を比較した結果, 抑うつおよび学業意欲が平均的である群と比較して, 抑うつを示し学業意欲が低い大学生のキャリア成熟度が低いことが明らかとなった。しかし, 抑うつあるいは学業意欲の低さのいずれか一方のみを示す大学生は, 抑うつと学業意欲が平均的な大学生と比較して, キャリア成熟度に差がないことが示された。以上の結果から, 抑うつと学業意欲の低さはどちらか一方を有することでキャリア成熟と関連するのではなく, 両方を持ち合わせることでキャリア成熟と関連が認められることが明らかとなった。つまり, 抑うつおよび学業意欲の低さの両方の特徴を有する大学生において, 進路選択や就職に際して困難が生じやすいと言える。今後大学生のキャリア成熟に関する検討を行ううえで, 抑うつと学業意欲の低さの双方の観点から大学生を理解することの有用性が本研究から指摘できる。

本研究の結果から, 学業意欲の低さのみを示す大学生のキャリア成熟は, 抑うつおよび学業意欲が平均的である大学生と同程度であることが示された。つまり, 学業意欲の低さが認められたとしても, 抑うつ程度が低ければ, 職業選択や就職に際して困難が生じるリスクは比較的低いと考えられる。学業意欲の低さとキャリア成熟との間に直接の関連がない理由として, 溝上 (2004) は,

学業以外の活動（サークル、アルバイト、友人との交際など）を重要視する大学生は、学業以外の活動を通して職業選択を行っていることを指摘している。したがって、学業意欲が低い場合であっても、キャリアに対する積極的な取り組み姿勢は維持されている可能性がある。

また、抑うつのみを示す大学生においても、キャリア成熟の程度は抑うつおよび学業意欲が平均的である大学生と同等であった。福田・朝倉・伊野宮・小室・脇坂（2011）は、将来の見通しがなく職業選択に取り組めていない状態や、職業選択に直面し情緒的な混乱が生じている状態が大学生の抑うつのリスクを高めることを示唆している。つまり、抑うつを示す大学生のなかには、キャリアに対する取り組み姿勢が十分ではない者だけではなく、キャリアに対する取り組み姿勢はあるものの、職業選択において困難を感じている者も存在する可能性がある。

最後に本研究の限界と今後の課題を述べる。本研究は横断研究であり、抑うつ、学業意欲、キャリア成熟との間の因果関係については言及できない。北見・森（2010）は、自分の適性や興味についての理解が乏しく、目標が定まらないことによって、精神的健康が悪化することを指摘している。つまり、キャリア成熟が不十分なために抑うつを示している可能性もある。今後は本研究の結果をもとに縦断研究を行い、キャリア成熟、抑うつ、学業意欲のうち、どの要因が先行して他の要因に影響を与えているかを明確にすることが必要である。

引用文献

- 安達 智子（2004）．大学生のキャリア選択——その心理的背景と支援—— 日本労働研究雑誌, 46, 27-37.
- 安保 英勇・石津 憲一郎・菊池 武剋・千葉 政典・猪股 歳之（2008）．東北大学における学部学生のキャリア意識(2)——キャリアアレディネスと職業志向—— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 1, 271-285.

- 福田 直子・朝倉 隆司・伊野宮 興志・小室 理恵子・脇坂 喜代美（2011）．大学生の抑うつ症状と職業未決定尺度の学年別検討 東京海洋大学研究報告, 7, 9-16.
- 半澤 礼之・坂井 敬子（2005）．大学生における学業と職業の接続に対する意識と大学適応——自己不一致理論の観点から—— 進路指導研究, 23, 1-9.
- 蔣 妍（2013）．大学生の授業・授業外学業観と達成動機・将来展望・意欲低下との関連——授業・授業外学習観タイプによる検討—— 福島大学総合教育研究センター紀要, 59, 653-665.
- 狩野 武道・津川 律子（2011）．大学生における無気力の分類とその特徴——スチューデント・アパシーと抑うつの視点から—— 教育心理学研究, 59, 168-178.
- 北見 由奈・森 和代（2010）．大学生の就職活動ストレスおよび精神的健康とソーシャルスキルとの関連性の検討 ストレス科学研究, 25, 37-45.
- 溝上 慎一（2004）．大学新入生の学業生活への参入過程——学業意欲と授業意欲—— 京都大学高等教育研究, 10, 67-87.
- 溝上 慎一（2009）．「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討——生課・生課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—— 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.
- 文部科学省（2013）．平成25年度学校基本調査（速報値）の公表について 2013年8月7日 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_icsFiles/afieldfile/2013/08/07/1338338_01.pdf (December 17, 2013.)
- 坂本 真士・大野 裕（2005）．抑うつとは 坂本 真士・丹野 義彦・大野 裕（編）抑うつの臨床心理学 東京大学出版会 pp.7-24.
- 坂柳 恒夫（1996）．大学生のキャリア成熟に

関する研究——キャリア・レディネス尺度
(CRS)の信頼性と妥当性の検討—— 愛
知教育大学教科教育センター研究報告, 20,
9-18.

Saks, A. M., & Ashforth, B. E. (2002). Is job
search related to employment quality? It
all depends on the fit. *Journal of Applied
Psychology*, 87, 646-654.

Saunders, D. E., Peterson, G. W., Sampson,
J. P., & Reardon, R. C. (2000). Relation
of depression and dysfunctional career
thinking to career indecision. *Journal of
Vocational Behavior*, 56, 288-298.

島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘
(1985)．新しい抑うつ性自己評価尺度に
ついて 精神医学, 27, 717-723.

下山 晴彦(1995)．男子大学生の無気力の研
究 教育心理学研究, 43, 145-155.

高山 草二(2006)．無気力と無力感——動機
の期待×価値理論からの分析—— 島根大学
教育大学部紀要, 39, 45-53.

Walker, J. V., & Peterson, G. W. (2012).
Career thought, indecision, and
depression : Implications for mental
health assessment in career counseling.
Journal of Career Assessment, 17, 497-506.